燕石十種二輯

戲作者六家撰

肖像圖入

國典
二類
百五九番
一冊

へ13
4110

早稲田大學圖書

戯作六家撰自序

是の六家撰は。ちかく六人の似顔絵をえらびしぶ。戯作者小傳より
えりぬきし也。さらばかの六歌仙のひゞきあるふりて。甚（許）さらで
ゆるしとそのうた人あれど。かの古今集の序（ハシカキ）なる歌人（ウタヒト）と
かけてなるおそらくべき人たちにはあらず。旦むげにつゝあそばし
ればぞ。まづちまほしくおもへど。さては年久しき閒之人（ヒト）なれば。
耳をならぶ俗人（ムヨノヒト）ならけひなじと。こゝろくうずまくて。すべて
六人（ムタリ）とあはせしかば。いつく名をばわが思せばるかなむ。されどかの（彼趣）さまを
ふ（合）くあて六歌仙をこのしるあ。あらど。とふのくにこゝろひるれば。その名は
えずまひあへずて。いさゝの論（さゞ）せんとす。いでや此むかし（六頭）の人
たちは。そのちからのあるくるかの。されど。われの道えてるところ

開場文庫
讀杜艸堂
52-4879
門 へ 13
號 4110
巻

えぬところ たゞひとつなむある。すなはち京傳はそのころあまりて
たとぞしらねば。業平にや似たらむ。三馬はつくりさまはえたれど
まことすくなし。遍昭にや似るべき。馬琴はことばたくみ
にしてそのさま身にかなはず。康秀にやよりなむ。一九は
そのさまいやし 黒主にやとりいでつべからむ。種彦はながれなる
やうにてつよからず 小町にやたぐふべき 焉馬はもじあまりたる
なるべし。喜撰にやひとしからむ。かくぞおもひいへるぞ。人ぞしてなづ
かしくなるは。つまさらどころなきことどもにおぼゆ
安政みとせといふとしの志はすのみそか日 吾師無物翁人ろ
書せしたまふにならひて あらはせるはいにしへの江戸のあき人
活東子といふ志れものなむ

山東京傳肖像

香蝶楼 國貞画

燕石十種二輯二之巻

戯作六家撰　蓰庵書農

附録画家三人　蛞蝀子補訂

山東京傳

名ハ醒　字ハ酉生　醒々齋と号す　又山東庵菊花亭等の号あり
通称を京屋傳蔵といふ　京橋銀座一丁目に住して烟管(キセル)煙包(タバコイレ)誌に
家製の讀書丸其餘製藥を鬻きて業とす　初め北尾政美に学ひて
画に巧にて政演と名く　又狂歌をよみて身軽折助と名のる　後著述を
専とせり　中興戯作者中の翹楚也　文化十三年丙子九月七日
病て没す年五十六　両國回向院に葬る法号　辨誉智海京傳

○浅草寺中人丸ノ祠の傍に建る碑の銘なりといふ　おなし回向院の
墓誌を挙しゆてその姓氏の精を知り且平常の戯編に
巧なるを猶現はれたる尤に挙く

明和六年といふとしの二月ある齢九歳といふ年師のかとに
いまそかりていろはもじならひそめし時硯のたま水しみづくる
あむ此つるにもあまたるされど伊ろさめもおろそかならく
みやびたるかたきを愛あるれとそこらし捨ひたりしかたのほかにて
うちそらんと倍はしひとつ愛つくあつ利益しとしむる五十に
ちかく倦くれとつくまる冊子八百部をこえたり　今はおのがころ
たましひも力なくして酒えもうすみゆくにいろしのこれに
たじろきごちにものみなじてわろかひふ老しらべるさ伝

あるハの筆以て八勢也

耳もそこね阿しもくじけてもろともに

世にふる机なれも老たり　　山東庵京傳

文化十四年丁丑春二月

愚弟　京山磐瀬百樹書并篆額

同碑背面

翁諱醒字酉星號醒齋　又號山東庵称傳蔵以其所居近京橋一字京傳故其為京傳最著磐瀬氏其先出自磐瀬朝臣人上近世資詮者仕太田道灌為謀臣道灌亡世隠於勢州一志祖信篤考信明仕某侯多病辞仕隠於東都市娶大森氏生翁及百樹翁少好稗史小説數百著作□冨戯文幼説謬悠無根能令人悲能令人喜坊間書賈進於剞劂者利市三倍於是児童走卒莫不知京傳者晩悔少作無益於世改勵刻苦捜索奇秘著近世奇跡考及骨董集二百年来奇談逸事考據精確可以補小史矣文化十三年丙子九月七日没歳五十六葬國豊山回向院弟百樹埋翁幼時寫字案於浅草寺中柹本祠側以遺財建碑刻翁國字記言以告後之讀其書而不知其人者爾

文化十四丁丑春二月

江戸　南畝覃撰

京山磐瀬百樹再書

窪世祥鐫

田向院中墓誌

亡兄諱醒字酉星一字京傳号醒齋号山東庵磐瀨氏
其先出自磐瀨朝臣人上近世資詮者仕太田道灌為謀臣
道灌亡世隱於勢州一志祖父信篤父信明仕某侯多病
辭仕隱於東都市　娶大森氏生二男二女亡兄為其長自
幼好文十歳縮寫孟子今尚存家自十九始有稗史之作
上梓者百五十余編因茲其名聞海内王公妾婦牛童馬
走無不知矣今茲文化十三年　丙子九月七日病没歳五十六
矣予弱冠出仕篠山藩病辭仕絆　与亡兄同筆研有年
無常風来玉樹碎　痴心月照蒹葭塋嗚呼悲哉

愚弟

京山磐瀨百樹謹撰并書

窪世祥鐫

岩瀨百樹字鋏梅号京山岩瀨朝臣人上之遠裔也
父信明勢州一志之地士来江戸娶大森氏生京傳翁
百樹及二女百樹自幼嗜文武弱冠出仕　笹山侍從多病
辭仕以儒及鋏筆之技為業自戯有稗史之作乞梓者
隨至編作日富与兄齊時鳴雖然少作之名為大方
所耻也時五十三已過上壽之半　故建壽蔵自記名氏聊
省亡後之労尓

京山岩瀨百樹誕辰之醉後撰并書

于時文政五年　壬午夏六月十有五日也

墨水石匠　窪世祥鐫

寛政二季庚戌秋八月

岩瀬氏之墓

岩瀬傳左衛門信明

男　傳蔵有濟　建

○翁の戯作海内に行はれて遠境僻地の老若男女も其名を知らざるはなし　故に其風を慕て戯作の業を学ばんとて門人たらんことを乞ひ入る者多し　されども許諾することなしと　きく　是も自作の冊子［絞染五郎强勢談］および［万福長者栄花譚］（両種共に文化五年刊行）小説のごとくあり「予ふとりなきと偏しく出入とも京傳方へ

戯作の弟子入らず仮軒中止」と見えたり　翁が門に入るもの近くは唯閑亭傳笑のみと或人いへり

或説に本姓は鎌田といひしといへり　又旧号を寶山といひしが古き冊子の序章に宝山の印章を用ひたるあり　且緑紐園蔵本 浮世絵師考 といふ写本を閲るに宝山と号せしと有り　弟子も見ゆる如く翁に近年は門人なし　明くは門人有りしと見えて京傳門人亀毛と称ふに見え又文化中も門人鎌田泥牛といふ名も見えたり　古き冊子［鷲岡勧進 御冨興行曽我］とくるに山東鵆吉（シホカセ）といふ名を記し　京傳二十五ノ暁に序文のぶとありまた山東唐洲といふも門人なり

活東子云亀毛ハ三敬梢婦にも折謂有名無実あり　泥牛又雛吉などもいふありなりん人なるよしあれど程なき故べし

○翁が生涯没年をもてかぞふるに宝暦十一年辛巳年之（深川木場に生れしと柳亭の記にも）

まゝ自作の冊子【作者胎内十月図】文化元甲子年 三冊 雀喜板 にその年にて
二十七年戯作なきよしいへれど安永七戊戌年にあり十八才まで
稿作なり京山子が撰べる蓁緒には十九より始て稗史の作
ありといへりされば安永八年刻成て書市にならべけるを
いふにて胎内十月図に自ら書るは稿本の成るをいふなり
○翁が著述せる草冊子又読本共に文体一風にてさらし
として女童にも読易く字薄は聞もなれざる字語
見も習はざる傑言をおかしく用ひず画劇の工夫おもしろく
同業のおよばざる事を専として稿本もまた格別なれば
紙ハ運しも速なり
○近頃何人の筆にかありけん後言(シリウゴト)といへる冊子あり許者の

名を隠志ければ其人は知れざれどその中に翁が撰べる骨董集の
説をある人奪ておのれが説のごとく志るせしを翁ある会席上にて
其人に対(ムカ)ひて「彼の説は師が発明なるを足下自説として唱へ
こそそれはいと遺憾なりといひしとき或人まぎらしく大音に
我いかでか足下の説を奪はん何ぞ證拠ありやと居丈高に
なりて説破せられしかば京傳それにて逆上(トリノボセ)て論議せざるうちに
持病の喘息(ゼンソク)大いに発して瘀血を吐し駕籠(カゴ)にたすけられて
家に帰りしが是より病て起もあがらず終(ツイ)に病床に
憤死しけりとし見へ或人の方が気死せしめけると人あまねく知れりと
あり」と(以上後言の文之)述べるは能否はしらずまた書賈文壽堂が話に
おけるはさる翁に絶えて翁は病をも受ざるして何ごともなくて

没後追補ハ家兄京山子續へりといひき

○世俗己を善とこゝろ得る者をさして自惚といふ自惚を
俗に艶次郎といふこの詞ハ顔のよき男と思ひ得るうたぶし
艶次郎なとゝいふをすて自惚よしと心得がほなる醜き男を
いふ是此言の起りハ翁の著述せし江戸生艶気樺焼といふ
冊子に自惚なる若者の名を艶次郎と号けり彼に此草紙
大に世に行れたれば廓中までも此艶次郎といふ詞行れて
今も猶人口に残りし今嬉婚を甚好とよぶ詞をもやめし
古の冊子ハ寛政九年の刊行なり其翌年に三和が著したる
冊子を文縁返ス艶物語といふを翁政演画きぬ是前年の江戸生艶気ノ
蒲焼流行るに依ての作意なるべし此何れも自惚を艶次郎と

いふ事翁より始りしとおもハるゝ文酒落本の中にも自惚を
さして嬉原といふ如何なる故か志らず酒落本の作者ハ酒屋
艶二といふ名ハ何れも嘉ふいふ自惚の名二ツを採て名づけらる
戯名なる事を穿鑿もなくなさけなき業なれども
まゝかくその事もしらぬも多かり

○文化五戊辰年著述せし冊子 絞染五郎強勢談 に通君を
おかしく画きしある繪柄ありて或ハ偏目(メッカチ)鼻缺(ハナカケ)または鼻より頬へ
うけたる疵をひくとうちたる柄なんどのいと見苦しき姿を
画きしたるを實の書物らこまごまといへる者のありけれバとて
読まで思ひ居きたるをあらぬ事とこのやうに画きひのこゝるを
これにも作者の志る業なり京傳といふ之世者をとし

途中まで来るのをかへし捕へてこらしめんものと兼て
相談ありせて舎つるがある黄昏にうち連立ちて其場所に
行んとするをうら不図翁に行逢けり 其中に翁を見
知る者ありて彼こそハ東條なれいでおし捕へて然さんと
下知をなせども伴ひ連る辻君等が翁を中に取囲く
取にたけり罵り吾くをなど彼ノごとく悪さまにいひき
乱しけるやなんど甚しく恨みに翁ハ思ひかけぬ事なれども
驚(コドロク)おどろくあらず 元より外視も思あしく中々むさく
けがらはしきを恨なれバ言をつくしていひあらそへども
かの輩ハ猶更聞いれず きゝわけなきを厭ふをみて故に取付
すがるを振りて有とし 離縁に及べるからこれ包丁(カタ井)に擇うち

されバ翁ハ存ふに吾にいひしらくして 吾後日にこの諺言の
験をみせん今ハ放ち遣しめよと怠慢(タイジャウゴト)してにげのびけれバ
やう〳〵に怨をまぬかれて後日の事をこゝろに納し 頓て
立帰り翁行しかれバ其場を湖遁ひて後に人しして
彼党に前日の謝物として御酒金をとゝのへてもたせ遣し
けり翁が名是より浮世にひろまりしと或人の物語なり
又一説にかの辻君を多く画ける冊子ハ寛政の初年の著述にて
といへども其ハ元ハ此の冊子に辻君を多く画きたるものを
みず 後の説に従ふときハ翁の表題あきらかならず 寛
政の初といへども強勢誤りハ遥に前の事にして 年ハ未
たしかあり 何とも定め難く 文話の虚実を並べ記し

○戯作者常に稽古を第一とするときハ物まなびのいとまなきハ文なり
甚しき寒暑を悪ミ未客の長座をいとふ事ハ皆然り
胸にうかみたる筋を書とめんとするときハ碁に耽入る人の
如く他念なくして食をも忘るゝ事よりたゞこれのミをもはら
情をもありたる事も覚えあるを以て皆人此のごとく被へし
翁平常種本綴れるときハ食事をも僅に少しく調へ置て
時を定めず 糒(ホシ)とおもへるときハ食しまた 溺器(オマル)をも置一間ニ
座て小遣(小便)をたしぬときけり 虚実の程ハ知ざれども 吾
身まゝたとも何ありなんとたのもし

○文化十二年乙亥の春中 諸名家の書画を乞て秘蔵し
老後の楽にそなへんとて 書画帖一巻を製したれバ一日

翁の許を訪ひて其染筆を乞しに翁ハ常に天満宮を
信じぬれバこの日ハ湯島の御社に詣て家に在さゞる鋪(こゝ)の
主管(テダイ)のいへりかれハ彼の一巻を主管に預けおきて翌日
ふたゝび訪ひしに早くも文障れることありて面会せざ
りしと彼の書画帖に自筆のされ歌をのして贈られたる
そのされ歌ハ 詩佛翁が画る竹の絵のかたはらにかゝれたるなむ
思ひくもみこれにまれどこゝろ有角を自慢に身をなれのそそ

○鋪 上にかく自画賛の 扇 額 冊子などを需きぬれハ自筆の
狂歌發句のたぐひハ多く世人の知ところなれども 左一ツ
二ツを出しぬがたく ぬきて ぬなりとおほゆるハ 錦鐘を
画きて

家業夢中　始終滅亡　正直律義　格別氣樂

雪解

拂子如意を画きたる賛

如何是通子再来の意旨かゝるまち　拂子舟よ揺むる

山くの一度に笑ふ雪解　みそこハ常くさへハあ猿く

同

狂言ハ秋の中ても外り外　楽の下がきに月の○（オモヒレ　思入こ）

同

仲秋の月にめでるハ今川がそしくもすゞく　酒宴遊興

餘ハ三馬が撰びし　狂歌觴に載る故に略す

○文化三丙寅年発行せし讀本昔語稲妻表紙（五冊）八書賈文亀堂伊賀屋が蔵板なり　又同年印行の善知鳥安方忠義傳（六冊）八書林仙鶴堂鶴屋が蔵板にして二書ともに世に行はるゝ事年を踰えずして売れし　続きてその翌く年

文化五戊辰年の春浪花の芝居において稲妻表紙の旨趣を狂言にとりくみてせしが大に流行なりしと　古今つゞきて稲妻表紙の後編本朝酔菩提（六冊）なるを発行せり　同書の篇端に其とこ趣をこゝに擬しいだせり

不破名古屋傳考

貞享二年の頃なれど萬川師宣の筆也　絵草紙二冊なり　名古屋山三郎絵巻と号す　詞書なりて稚古山城屋小幡の里に住む名古屋山三郎といふ者　父三郎左衛門正春の跡同國伏見の里に住む不破伴左衛門といふ者を討る事　北野のほとりに住む梅津嘉門兄をかくまへるの篇妹わが事を志るせり　いとおかしげにて實記ともおもえず　又其妹の筆に

名古屋山三郎傀儡の総称を世につたふるといへども詞書
なければ詳ならず　僕案ずるに延宝天和のころ古作者が
浄瑠璃節に作てうたひたるが自然児女の耳に残りて後世に
伝へしと覚ゆ　山三郎が俤は庵蔵猿次郎といふ者なりしと
いふは貞享の頃か　舞曲扇林といふ草紙に記せる説なり　又
名古屋三郎左衛門猿楽の娼家の奴僕に猿といふ者ありと雍州
府志に記せり　延宝八年江戸市村竹之丞に於て松女論といふ
狂言に元祖市川団十郎始て不破伴左衛門に扮作せし時二十七也
山三郎に扮せしは村山四郎次翁蝶子に扮せしは若伊藤小大夫之
其狂言大にあたりて三年のうちに同狂言を同戯子にて
三度興行しけるとぞ　其頃伴左衛門に扮せる衣裳に始て

雲に稲妻の形を摺ぬ是をぞ南きといふ趣書に載せる稲妻の
ちぎりえたり不破の関といへる翡翠の句にありとぞ見えて
団十郎自己の作のみならず志ありて後伴左衛門に扮せる
者は必ず衣裳に雲に稲妻の形をつくる事とし　故団十郎
前には◇如此の紋をつけたるが伴左衛門の狂言の後稲妻の一つを
轉じて回如此に更（アラタメ）たりし　従は則三升の花菱は回如許
稲妻の形雷紋なり一説に草履打の事は元禄の末年
花井才三郎と以ふ役者（ヤクシヤ）と不破某が事より起れりといふ
名古屋山三郎に扮せる衣裳には昔より定まる花紋（モヤウ）なし
僕稲妻表紙前編若迹の初　稲妻の花紋縦横の句にあると
づきぬれば山三郎の衣裳も縦横の句にかなひて　これと思

よせて傘に桜からかさなる濡燕といへる晋子の句意をとりて
出像の花紋なす物に燕の飛びかふさまを画しむ。これよりて
這春浪速の芝居両坐ともに山三節の衣裳に濡燕を繍(ヌヒ)し
つるよし聞にて稲妻なる燕よき一対なりして忘れも濡といふ詞
に一ぱ似合しからべし稲妻表紙の傳奇につきて浪花人
ぬきつぐあといふ小曲をつくりてもてはやしらふよし文化の始めし
いわとせよ。契りたがへ鬼つぶやくハ。人ののきばにせきしいそとま
ふけ。やくをはらんて。西よ東とゐずみをもとめ。さてうまし
げよ日をおくる。かまくらハゐやしからぬ。不破の世やの
宴の戸に。世紀とあらまそているづまや。ありとハへしてまぞ
とも。あけていそれぬ相揃のうち。つむよあ編る神の前がんハ

三の傘に。桜ぐらかさなぬまつきあ
音なよ八人出好つくりし咲花のそなふさかぶの紀某なし
もこの世をくらせり

同

各位の主顧よ告まてまつる文化丙寅の冬如皐豊国へせる
醒々先生の稗史稲妻表紙前編六巻申に刻し今年（文化五戊辰春）
浪花の戯場両座において那(カク)書の吉鐘を傳奇よ翻案して
二艶(テカハリ)仮とし大に看官の耳目をおどろかしよ到りておのづから
後編渇望の人多し おりよ清朝康熙二十六年の末西記
坊の雑劇よ演義三国志と翻案して「千里河塘偃月刀」を
つくり水滸傳を翻案して「[illegible]文西湖柳」をつくりしう

那ガ安書の世に行はるゝ一版を適せりといふ稲妻表紙における
和漢同日の談といふべし これによりて 再丈先生にも後編
一部を得て上木せり 四方賜顧(ヒコ)の君子各地(モヨリ)縁分ノ諸書
舗に就て索(モトメ)て一読を得ば後好判(コキヒヨウバン)を所請希也則
那南畢請竒の標号并(イテタチ)相の図を翻刻して左にあらはせり

辰正月廿五日より道頓堀角の芝居二の替り狂言

座本 藤川辰蔵

きのふハ不破の関色くら
けふハ名護屋の山色くら けいせい輝艸紙 校合 十冊

右狂言作者 並川七五三助
同 近松徳三
同 市岡和七

辰正月廿九日より 道頓堀中の芝居二の替り新狂言

座本 小川吉太郎

稲妻表紙ハ姿の彩色
十帖源氏ハ意の写絵 けいせい花品評林(しなさだめ) 再誌 九冊

右狂言作者 並木三四助
同 奈河篤助

近年江戸堺町中村座にても右稲妻表紙の趣を狂言に仕組
せりまた安方忠義傳ハ近年天保七丙申年夏狂言小中村座
まてせり名題ハ「世に善知相馬旧殿(うとふやすかたふるごしよ)」といへり 二番目ハ世話まて
お房綱五郎ホを合六月七日初日にて興行す 作者中村重助
宝田寿助 三桝屋二三治ホ也 古の狂言又ぎゝんハ残念とて 七月
廿九日より稽古に役割の 滝夜叉姫 後ハ周尾 二役より妾 三役 十七九

藤浪五やく九郎兵衛 六やく 藤田七役 権之助 八やく 純友異
右市川九蔵勤む 良門二役 頼信三やく 二の瀬源吾 四やく 綱五郎
五やく 大宅太郎 右市村羽左衛門勤む 鷲沼六郎 二やく かけちの
三やく 光遠 四やく 佐五郎 七一役 名を忘る 右市川團三郎 つとむ
小蝶前 二やく 鈴木 三役 お房 四役 小萬 右市川こま三郎 荒牧九
二役 花照 三役 佐七 右大谷友右衛門あり 大当りすべて何れも 比類なき
評判何れもなり 斯のごとく 渡海語の 趣向を今に其まゝ狂言に
仕組 看客(ケンブツ)の目を 悦ばする事 翁の誉れといふべし

式亭三馬肖像

式亭三馬

名泰輔 字久徳 本町庵と号す 通称を菊地太助よ云 遊戯堂
洒落斎 哆囉哩楼 四季山人 遊戯道人 戯作舎 滑稽堂 等の
数号あり 本町二丁目に住して家製の薬を 鬻ぎて業とす
古今戯作者中の英才也

○書川亭云 三馬大人の父ハ八丈島なる為朝大明神の神官菊地
某の娘雪が妾腹の男子之 剃髪氏まて 菊地茂兵衛といへり 安永
四乙未年浅草田原町三丁目に生れ 文政五壬午年閏正月六日没す
時年四十八 深川雲光院に葬る

法号 歓誉喜楽癸天信士

辞世 善もせず 悪もつくらず 死ぬる身ハ地蔵も誉めず 閻魔叱らず

文政二年乙卯三月
上浣建之
七十五翁
須藤田宮自録
應需本町庵三馬書
碑ノ裏ニ如此アリ
安政七庚申年閏三月
一日記　活東子

○活東子云昔往年柳島なる妙見の境内に建てる碑面を
見し事あり　其ハ俳の辞世の詠を代作して「ありもせず悪もつ
くらず罪ハ仏も蒼す焔魔おそれず」とありしやうなれど
うろおぼえゆゑ再尋ぬべし
又云此辞世ハ須藤田宮といへる醫師が詠にて三馬に書せしめて
彼の境内へ建し碑之都合が為名なりとて人皆さ思
へると彼人自ら語られしと友人蕙栗園（サヘグリ）西両国橋吉川町書林山田佐助の話也

活東子云予がきけるハ本石町四丁目の書賈翫月堂堀野屋仁兵衛が小僧之と数人之了北林堂の話ハ虚誕なるべし

○中橋の書賈北林堂一年昔ハ庵を訪ひし事あり　扨彼の店に
ふ三馬ハ幼きより僕か家に仕へ長ずるに従ひ頗る奇才あり
十七八歳の頃始て戯作をなしぬ　後山下町の書賈萬屋太治右衛門
号蘭香堂か家の婿となりしが配偶の女病てみまかりし後彼家を
出て四日市に古本類を商ふ小店をひらきしに其頃より
専ら戯作をなしまた石町新道子ト居せしが本町へ
移り住り西宮を名のりき春松軒西宮新六と懇意なれば
なりけるとの話也

○文政三壬辰年正月十六日昔筆て本町庵に西會し知己と
なる前年文政二己卯秋浅草寺中において諸人の競ひ視たる籠
細工の観物より思ひ附たる戯作ありと思ひし時の記とて一
冊に上んとの心ありて稿を綴り小冊となし是を大人に見せ
たり大人一覧の後に云此作またなし感ずるに餘りあり吾
門人三馬が梓にしたる籠細工の見物譚にハ猶まさる趣向といへ
とも惜らくは文辞古びて當世の風ならずと評しのち梓その

物語に及びし其の日ハ彼小冊を懐にし貸せといひけるにぞ
やがて大人にかしけり そのゝちかの許を訪ひしが當時(ソノコロ)世俗の
流行詞にいつもお若イ様といふことはやりけり 大人ハ
素より狂歌をよくして好屋翁(スキヤノオキナ)をもあるじとして先師誌大
家に交り多く撰集の狂歌簡ありてこの道に長けられける
大人の笑種なりとて即ちその流行詞をとりて一首の狂歌を
ものしてみんとそのさまを詠ず

はやり詞さとりちぎえて達磨まんいつもおあのひのしなぞろ

大人即ち書めされしハ此狂歌ハ書画の會席上にてものに賛
などせきて即興になるものなりといへども近頃の狂歌にハ
珍らしずと笑ましが後五七日を隔て画會のまへ大人云己

いぬる日さる席上にて頼つゝ咏まされたるさまを詠ふ
まづ岐蘇あたりにおかれぞといつもお若い花のかわぞせ
即ち青柳といへる題にて

さえかへり山も霞の頭巾きてめでたういつも峯の青柳

といふをうきつけていぶしうたにさえもえりの五文字おかしやら
あるらしなむくらうのと志のすべしといひもしけるにつけておかしくぞ
いひまれまて山も霞の頭巾といへるがよくゆかしる狂歌なりけり
この日大人が狂文にてものせらるゝ端唄とかいへるもの五
文ひく六ひくまくだらけ百人一首といふ小冊に序文を書れ一冊を
おくりまして日外貸おける即ち標若を返されき

○一年彼書画帖にかきてもらへる歌

活東子云峯の青柳
とハ俳音也柳ハ山に
生(オフ)るものあらず 万葉
集巻四に青楊(アヲヤギ)の葛(カツラ)の
本山(キヤマ)爾云々又十一巻に
春楊葛山(ハルヤナギカツラキヤマ)に云々とあれど
それハ枕詞(マクラコトバ)之こと既く
加茂翁も説れるやこの
かゝるにハ催もあらぬ
べけれどもまくたら
人もまれこハあるまじ
故郷(カレ)おどろかし
おく

爺は山の東方朔婆は川の西王母三千年のむかしく遐齢
延壽の一話さえし儒家の桃は百とせ
その桃の根どし葉どしのそれからはのちもおれしの種ぞのこれる

○文政四辛巳の夏本町庵を訪ひしおりしのついでに己も去年の
夏窓山楼に招れしとき文晁翁の内室が折紙にこの一紙の
流行唄をかゝしつるにさしこあといふ囃子ありしを本町庵
にもなされしかどもそれらはしも覚侍らずと大人にものがたりし
かバそは去年の春のことなりそれ狂歌かきつけて進せんとて
傍にありける蔦屋流の紙にとりあへずうちかきつけて送られ
たるがこれなり歌ども

栄之翁の書画會ありける時隅田の桜のゑを画けるに
隅田堤吉原に時におくれじぞといへるか若い花の色かせ　三馬
狂歌堂真顔翁傍におはしけるが我も流行にはおくれじ
とて文晁翁が蝶のゑを画ける扇に
今はやる人のゑきける絵扇は蝶く静に聴くさしこめ　真顔
狂歌のまへなる歌よみにと云ひ給へバそぞの下に
今はやる蝶く静とよまれてハ急に試合こりや文句かい　三馬
時は文政の三とせ深生のもじめつてありき　式亭書

或人云
三馬は（式亭）をうしきてんの
歌あれけれど
焉馬は戯名の如く偽り
多かるべし

○書画の會席においてゑのうへに應しとりあへず賛のざれ
歌をたゞちにかく書て人にあたふるものは三馬と故焉馬の
たぐひは双ぶものなかるべし當意即妙奇といふべし

まく一時大人しづかに抱給ていへらく己幼きころ何冊なりの
その去守公の奥殿に仕へやみけるをりなれバ折々御母へ対面の
ため奥殿へ至るごとに好む所なれど傍にありあふ冊子をとりて
読むをその常となす 仕女たちこの童ハ幼弱ながら禁なく
書を読ことの独りす今の時よりかく文字に長じられバ後に
いかなる者にかならんずらんなどいひあへりし 十三五歳の頃までに数
多の戯曲などをよみてしく覚へ獨し 十六七歳のころ戯作の志
あり十八歳にして獨立にて始て天道浮世出星操 三冊 豊国画 西宮板 寛政六寅年刊行
といふ黄表紙を著し出板し 始此冊子を作るのそもはじめ故に
我も食の袖より出るをいかにして稿を脱しより草稿てのち自ら
戯号をなつけんとてさらんぎと思へる西三名を小さき紙にこれ

つけたる紙をふくおし捨てまづる傍に投てこれを又拾ひ
とりて得たる所の揺紙を披きうきつけあし戯号を則
式亭三馬としたりしが是まて心を楽し遂に其号を用ひ
たりおしつゞきて年毎に一両部づゝ著作せるうち寛政十一己
未年侠太平記向鉢巻 三冊 西宮板 といへるを著したるに人の嫌疑を
得て其の怨る所となり遂に
公に訴へられ種々の御咎を蒙り書賈をはじめなべてに
父なるもいたく勘労をなしけるもやがて御恵をもて赦免を
蒙りし後ハ父の志もなく戯作の業を廃せよと諭どもなほ
その道を捨むる間ひとゝせを隔てまた著述をなしぬるがかの
年よりして愚名まづしく近頃にいたり雷太郎の一件

大に行はれしより幸にして年々評判つよく世人にもてはや
さるゝ事になりきといへども亦

○大人が撰べる 績本に阿古義物語といへる五巻あり 稿成て故
一陽斎豊国が許に稿本をおくりしかども一陽斎いそがはしかる故あり
てか繍像ましまして前後をとりちがへ画きもすやうやく出来しに
及びしかバ其故か半ち未画具の筆に 式亭 憤りを発し ひそかに 剞劂の 文字を書き
をころまでにことを蔵奴にせる其心根こそ悪かれとて自ら
一陽斎にいかりまのあたりに大のをとりてこれを罵りその無礼を
責しかバ豊国怒りて言をあらして諍ひしかども式亭が怒解ず
これより何となくたがひに隔心いできてこの方までは吾作意
なる冊子には豊国をして画しめじといへど彼方にても彼が
作れる冊子には吾かつて画くまじなど罵りあひしが書賈
伊賀屋文亀堂がはからひにて双方和解し文化七庚申年
文亀堂が上木せし一対男時花(ハヤリ)歌川といへる冊子は三馬子が
編述せるところにて前編六巻を一陽斎画きてこれを初日とし
続く後編六巻を一柳斎豊広画きてこれを後日と呼び初日
後日二日替りの狂言のごとく執なしところ両子がひ画に
せられ逸れるをはかりて一入興ありて彫刻に網にいできて是を
もて式亭と一陽斎が和睦の媒となし文亀堂発市に及びしが
めづらしき試なりて甚しく面白き冊子なりとて看官の評判
つよく行はれてさきと亡友一風斎国安子が存生のうちに物語りぬ

○文政九戌年刻成る梅精奇談魁双紙といへる読本五巻を

浪速の書肆文金堂河内屋太助江戸の書賈仙鶴堂鶴屋喜右衛門と
ちなみて合梓して其事に及べり繍絵は國安ぬし画けりいぬる
文政三年辰の秋三馬子この草稿五巻を予に託して浄書せ
しむおのれ拙筆をもて志をとめんもかたかるべきを固辞しつれ
ども許さず遂にせんかたなく随ひ毫をとりたれども遅筆にて
やゝ翌春におよび卒して稿脱しぬ大人常にいへるは京の草
紙のさしゑは豊廣が男豊清なりて画しめられしが彼も不幸
にして世をはやうしその画をもみずとて其画さしの繍絵
三五丁を出しえせるさてその後國直に画かせんとて稍なく
彼方へおくりしに是れとも出来ざれバ為方たりとも私しとし
己の其事が浄書早くよりおよそ聞ひとらせを経て成の其

國安ぬしの筆にて出せり又一対おのれ大人に従ひて予頃日書友
ある光房といふが端鑒にて源氏物語末摘花の巻を施つるが
あれハいかにも雛形の挂にもあらなんやと問はれば大人答へ
素物語にて随へあれど読人おほく和文辞をつゞるにたよりを
甚ざるものなしといへども雛形者の素意ハ古本に帰りうきものに
かへず貴君今より雛形をなして心を盡さんとおもひいかゞ
源氏一部の講釈をもなせず施つきを及ばず源氏のとも
水滸傳の事もきこしめされずとおもひこそ似つかはしからぬ
しきをとりなして知らるゝぶりに書んこそ雛形者の
些るとあるを本なれ僕り源氏に擬るにそかやうとおもひなやと
縁ひきあげる類ならざるし源氏風ハ字もうるさし雛形

作者の腹といふものハたゞ座敷店の賣物にひとしく手裏劔
うちかゝる原稿をもこえまするの田楽も出さずもなんでも巴文とより
離ておくんなまし如意なれとて手を揃て知らぬ氏の言いま
思ひやりてよむべし

○またく大人が冊子の稿を草する時ハ三日二おもして凡六七巻或ハ
八九巻の稿を脱稿するを志むべくなり故に巻尾に三日二まで急
業とことわりたる冊子も多くなり文化のはじめ合巻讀本倶に
流行し頃ハ三馬豊国なる諸方の書肆に種本寫本を
乞需らるゝに長編の頭に滑稽語りくるに苦しみて五日
或ハ七日ほどかゝりて書肆の許に到り一間を借て草稿を
脱しまたハ絵を画ぬとなりたとへハ今までも某甲(ナニカシ)か二階に
在て翌日ハ某乙(ナニガシ)が離舎に行きなどこれかれ廻りて尚
その手にうつりて編集の頭におくれたる書房あまた
それが方に廻り行ほどなりしといへり昔ハ今のごとく作者の
責らるゝを苦しみて行先を知らせず後に出やすくして
作料潤筆などもなかりけれバ潤筆を取ことなかりしがひとり
京傳ハ京より潤筆をとりて作者稿本を書肆に与へ
その冊子の幸ありて行のち書肆の利を得るものハ求め
ざれども先方より謝礼として縞一疋或ハ縮緬一反など
贈りおこせしのみにて後ハ作料といふものを定めて作者の
身へとらするやうとなり戯作をもて営世とするもの出来たれども
なほ金を取るにいたりて稿当りあるものハ當り振舞とてその

書肆も作者画工を使ひ 或ハ戯場又梅に至り 我も狂躰に
出るもならぬ是稗史の流行盛にして板元の利を得ること
百倍なる故也と三馬ごづきの話なり 亀鶴が 近曾ハ
うつて出り 振舞といふものをやめず 是全く稗史の流行
車中古よりハ遥に甚しき故なるべし まゝ冊子の発市ハ
吉日をえらみてするハ常なり 此日書肆ハ蕎麦を出して
作者画工をもじめ刻摺製本の人々をもてなせり

○大人に二代目芝全交になるべしと進る人ありけれども業に拙
して古人の名を汚さんもいかゞとて止るよしをきけり 其後の
楽屋(ガクヤ)通および馬鹿の他の廓節要に「式亭三馬撰 古人芝
全交の遺言に付 此度より二代目の全交として三馬を笑ふ顔さらや
しきを妄作をもって古人の高名をけがさんハ志に違ふ者と猶いまく
改名ハ不仕候ひ人独立ハ狂言作者全交倅と記息ハ一郷本事」
と記せり

○式亭常に詠ずる所の狂歌狂文視聴しるをいさゝか左に
挙ぐ

早春鶯　のどかなる雲雀の聲よきのんきにめりてちゝ鳴一聲

吉原花　さけのある花のよし原も山口よりぞさ初めぬ

古今集序にいでまるる聲文ハ歌よみけるあの蛙

首夏　遅桜ちりぢりつまごりといふまに夏ハちよとこさん

鶯　汝(ナ)が手をまちえてしよりも鶯よ ころまちえてる福を娘しよ

月　村雲よ弥ヶがしたくハ除けて月の入べき山にまかせの道

山水 瓢にて飲める酒のうちよりも耳にきこえし や清水の声

中の町うつりて客も大名氣げいしやもついのさし給で来る

路 人とハぐさもいとえ中まりあんぞといふとききくぐるはゆ

深川 雪 袖といふ名さしれありてあるまま借りに絹つけぬる雪の中から

傾城にまとなしといふ君なせいまらえといふ客やいひとぢめぬらん

買出にあるまハ一の富の園でなんの客にいやるのもいわれ

吉原 秋夕 さびしさのいろといハいかにどよし原にうしろをみせる秋の夕暮

禁すのにそのたゆましひの人面ともいろきあんまいはぬ傾城

ひとつ家のいまし五町まちの人をおもへぞ

思うてられぬ腰まハといはで宿るあまくさ寺をうしろくんり

まるべの雪の梅別深つまるを出る傾城あるぞ

いかる宵の乙雪まうくやくそくの客もあるなん

吉原 雪 よし原の雪まぞのりハあるまさら娘をして晴しなつげ日和

福禄寿御画に松竹梅の賛 三芝君ハ花さく頃七福神の月の宴たまられ招ぶ君

あらくまんぞ命も長いきの福禄さんのお御巻の

おつふりの長いであって福禄寿よと御老にひ移るゆえぶし

福禄寿賛 福禄寿あどくお名をぶ中さずといはずてしまて長いきの人

朝顔 種なりて餅をまぬくかり咲いて朝のいかさぶわの石那

三味線ようれて恵比須イヨいりが銅の浮鏡やくしゆきせりる

草摺をひきちぎり みよ志りかちをついくらみんの纏のつまをまよ

いけるハささも妙法蓮華経よろそ千あのたかぶだぶし

色も香もさて わすぐるし 業平像小町 桜すま まさる 花ん

女絵の賛　何ぐさんものハおもき向顔よりもよこむきさへなれかし面ぬ菩薩

同　本ものと見れ図を立面ゆひしわきもとそめて袖いろまさり

同　世の中にたえて女のなさけせぬ男のこゝろのどけからまし

同　見るところ妙なるかぎるもるぞひとめのそのそてなひき袖なり織

同　家とるさと守り袋を何らくある氏神よりもうまつのこのみさゝ

奥女中　お宿下り親の病気をいひたてゝみ指算をだしまつらんかり

女子の欲くらゐをとる画に　おさへ込をふりきらんかり欲うるさとりてやハらのやハらかれ気に

彩色のちとも(いそず)絵のさハ素人おもちをもつかしに世よ

富士絵波むさし志もさ絵と文字と両方に入る両曲の合

狸々酒ニ酔たるを自身書のゆめ抱なる狩欲の賛　貴人のあとむかハよく大盃の口ま杯されるも下戸の

狸々酒中の譜をしらじ

生酔に前さきげが狸々ハよくまいとも ろうらさり けり

菖蒲　池水にふせる菖蒲の葉枕なりがねを風のひきおとさらん

洗濯におもちく何らき奴凧　たゝんのなかので　うまくさせし

芸竹のようやく鳶(トンビ)も鷹なりき　黒八くら凧子をたんくらくらの

長いきの寿の字ゐ粉も繍をうけて長いきとふく万年の亀

名歌をそ称みし画筆が心の鬼の角だらひな

小町もきよう水をや汲らん

いひかけしらべて八双紙の文字ともまた何ところ何ハされなり

不似合の鼓を七色蓍樹とて礼くよふつる味ひ

唐猫の人なれうちてあやしうちなりのうきねるなんぞべむと

常にそひゝ朋ハ台條院の姫君なりし由猫の綱つけたるハ

馬廉らしい程可笑くざんきと無にあづけおしハ三浦屋の
薄雲なるべし

瀬川菊秀
似顔の賛

白黒の色はあやめも菊とる思案の外の梅の妻恋
とふまぐろ孔浦浪ぶくれぬ里に顔あるハ浜村なる
かあんとなるハさぬぐの仮げがすにらいと呼ぶ法眼の
ろうの鶯かあいすくいハ葛葉と客まてとう聲のうふ表
有と思へバあしなれとおもへバ何ぞ是明色明是空
明色也

奥山になく鹿もきく時ぞ秋は悲しき猿丸の聲
如何祖師西来意九年面壁ハすんざんも苦界十年
お客を相手ころみ被の身も芦の葉のまあふぬ

うきふし志づき川竹の流を汲む真実ハ色客への操に
して不立文字のきまぶくおもへバ直指人心の如ひきうなり
以心傳心の格子頭へ見性成仏の床の内ちゅうかハ本来無分
別きまるハ心外無別法迷へバ通も不通となり悟れバ
不粋も粋となる柳蒼花街翠帳紅閨柳ハみどり
花ハくれなゐの禅味にかよひくる鳥なくひたとひ未ハ
こどうとよびとも花もられないハ客の心の色ぐゝ呼駒も
猫の呵囉ゝ唱「達」磨さん腰らちやハ台磨生女をた
らす一棒九なし
仟園山に帯をとどめて卧せる旅人客をおやあし中の町に
翁ち猫を遊て阿の達観あしの香をいつる豆麿の居

禅の床には悟をむすぶ人をよぶも芦のひと葉の枯牙
知るものぞよりくる浮世(ウハキ)の客には面壁九年十年の苦
界の憎を忍のしむるもわからぬ鉄法の闇の中ふらふらと
客はいつくるぞや写楽緒川の流れの戯才を什麼(ソモ)さん
案じて　おくんなんし

さとられらし　客と密夫との恋の海より河の葉をとりくらべて
からかいなお猿に替えなんあるかいなとんぶ　趣向が首回歌舞の
あまれども山出のまゝとりまぎれてからとのくま縁くる跡の哭
浮世の風は見通するおとづれ口舌の面は様構にされざる
まつよひの心いきを激東節にいかせきめぐの恨を八幡
鐘にかこつあくびくの廊下おさるに香酒のこんなくなう

わもしばしのあいびくの明烏に離まのちんくなり密夫(マブ)も
まじめはお客だよ客まく密夫となるをみは必お逃い
うちに有べし

七代目三升の助六の初役をよめる

助六の入りはわかりし　木戸口をまくくぐる揚
梅屋しき古屋は紫の皮つゞき香(カ)はつゝみまで送る来か伊

新梅屋しき

枝ぶり図ぶりにして　梅にかく声をきくらう庭の鶯

曲亭馬琴肖像

曲亭馬琴

名解 字瑣吉瀧沢ハ氏也通称清右衛門と いひて元飯田町中坂下の木履之甚を舞子譲り 名をかへて男宗伯 松前侯醫師と 明神下同朋町 同居を 文政七年の頃判然して 篁民といふ後四ツ谷 信濃坂の上ニ住居す 嘉永元戊申年 十一月六日没す 年八十二

法号

辞世 世の中のやくをのがれてもとのまゝかへすハあめとつちの人形

馬琴寛政のはじめ 京伝の門人となり 京伝より大栄山人の号を譲らる是深川永代寺門前出生ニ而永代寺の山号をもて戯名とす

寛政三辛亥年 芝神明前和泉屋市兵衛より出板の二冊物あり 外題ハ

廿日余四十両尽用而二分狂言

京伝門人
大栄山人作 あり

戯作の名称ハ寛政五癸丑年に馬琴と改む此年発市せしを左に記く

街談浮世御茶漬十二因縁（おへちやづけじふにいんえん） 二冊　荒山水天狗鼻祖（あらやまかかぐわんてんぐのはじまり） 三冊

花園子食家物語 同

寛政五癸丑年より嘉永元戊申年まで五十六年の著作数多なれバ略く

黄表紙合巻物書かえ画入読本まで手稿多し

○翁が剃髪の年ハ【傾城水滸伝】初編八巻翁自作 巻々の八花がらの阿達が剃髪のところに書入して

呉竹の世をすつるまで何かと賢の毛のさかしたぶさわざ

かくて元結のときはなれぬるを沖こちへ抛やるハいといふせくも

黙しきよいぬる皐月のはじめつゆかなくをあん剃まろめて

雪まのるこしちもおのが白髪もそりすてしより夏ハきよみよき

とにまきて ひとり 笑ふをこがましき さまをあざら さらなり

給組ふとりあはせて書入のうめくさとす あなかしこ

斯かれハ文政七年にこの稿本をなしつるさて年剃髪の

後とまぐしさて原ハ武辨の家なりしが翁ハ多病の故に市人と

なれり後年 棠山先生 柴彦輔 を師として学び学力の長ぜし

事他の稗官者流の及ぶ所にあらず 常に児戯の小冊子を

編むといへども翁が素意ここにあらずその故に先年著述

するところの【燕石雑志】および【玄同放言】のごときハ有用の書に

して大方もこれを閲しその説ところを是とすべし 今年 天保戊戌

七十二歳にて精力衰へず 志て益盛に 稿を草するも紀俗に

いふぶつつけ書にして綴りゆく文章 水の流るるがごとく なりとも

従むとなく文化一家をなす 殊に讀本の著述多し 就中世に
聞えたるものは 椿説弓張月 朝夷巡島記 里見八犬傳 の類之
開巻驚奇侠客傳 近世説美少年録 の二書は近年比發行
にていまだ物語の半に到らず 編を嗣く佳境はいたらねど評判
はなはだ高かるべし 又近頃合巻なる 傾城水滸傳 なりたれ
世に行はるる八犬傳は今九輯にいたりて満尾せるに近しと定め
此編の行はるる事古今無双なるべければ さる故か近年
浪花なる狂言になしつるよし 聞えて浪速の画工が画きたる
大錦絵数枚書賈文溪堂の蔵せるを見るままに記して狂言
せしは天保七丙申の夏 木挽町森田座にて名題を 八犬傳評判
楼閣」として興行す 狂言作者金井由輔 寶田寿助 三升屋

四郎なども一時晏春亭梅麿に誘はれて この狂言を見
物せしが 其役割のひとつふたつをまづいはん 犬塚信乃 二やく
網乾左母二郎 三役 犬村角太郎 四役 唱禰上人の 犬山道節 五役
とくの大角郎 六やく 犬田小文吾 右市川海老蔵つとむ 犬坂毛野
二役 白雲 三やく 稼助 四役 蔵人 五役 山林房八 六やく 犬飼現八
右市川九蔵つとむ 濱路 二やく 雛衣 三やく 伏姫の霊の 雪姫ろ 右
瀬川菊次郎つとむ 荘官 蟇六 二やく 馬加大記 三やく 文五兵衛
右大谷友右衛門つとむ 左村 二やく 舩虫 三やく 黒雲 四やく 額蔵
右市川寿美蔵つとむ 亀篠 二やく 成氏 三やく 飛書 右市川
升五郎つとむ 梶九郎 二やく 水上宮六 右市川一友つとむ 犬江
親兵衛 市川團十郎つとむ さるに当りて八犬のうちしが 狂言を

西多く芳流閣の場ぞよし その中にて取分 市川白猿がむかしの
役に扮(イデタツ)したるを見るに悪棍(ワルモノ)となりし古手郎がうらく馬琴が
八犬伝の趣(タチユ)に在しなれども遠はず 綾深の禅も故人柳川が
画きたるに一点たがはず 彼が衣裳にいたるまで精細に心を用ゐると
許の如しと憎たんそくしたりきこれ後に八今年天保九戊戌年
閏四月より市村座にて名題「戊歳里見總梅」として興行せしが
是もそのかしましき評判ハあらざりし 然るに 讀本を芝居の狂言に
まで仕組せしめたるは京伝と馬琴子がこよなき両国といふべきのみ
○天保七丙申年 翁が齢古稀に及ひぬ 諸人すゝめて年賀の書
画會莚をひらくべしと有しかど 翁ハ許從(エルサ)ざりしが 秋に至りて
終にそのすゝめにまかせて 八月十四日 柳橋万八楼上に 諸人を集

會せしむ この日まれまれなる盛會なりし事も 今にて知己あるのみならず
當時ハ儒家書画家 両侯 前集叢市にて 前後二編とした序文
も翁の書きてける 同派の人ぞ 他人までも 誘引して出
席する その以前 書賈文溪堂翁が 孫興邦を将て 翁が家に
詣来て 自祝の賀歌を乞ひしかば 齊紈(アフキ)ある者は 扇を 送れる
その賀歌を左にのす
老せしれよきひハけふ迄にて 亀のよろ川よりぎら 亀を おふす鶴
谷かしおそで出よ あとさきの友とせん このち みの亀 このち 笠松
賀莚の當日 市 初めて 東里山人に 画會を 先醒として 扇子を出し 馬琴ヨ云
たるに 辞退ありしが せちに すゝめ 強ハ 書れたく 送らせ
馬琴叟が七十歳 賀莚をもてはやす

七十をあまりて一日でも二日でも正氣候得ず身いえれ爺様
翁なきこころハ老眼やうやくに病衰し終に盲となりぬれども
著述をやめず婦（ヨメ）をして筆をとらしめんれの口授して草
稿を代寫せしむ

八犬傳九輯 五十三ノ下

回外剰筆

（上略）恪而（カクテ）寛政二年の冬。剏（ハジメ）て戯墨の画冊子（ザウシ）二巻を編て。書肆
甘泉堂が刊行せしより。今年まで（天保十二年辛丑秋八月）五十二年。刊行の雜書
物の部共に。二百余部餘筆に及べり。這他（コノホカ）刊本せざる筆諭雜纂
或ハ二三葉の小紙子（ウスモノ）多かるを。数へ尽すべからず。（下略）

同

（上略）吾とて。洒家（ワレラ）ハ昔より。戯墨に門人といふ者なし。三四十年以前吾
戯作ある画冊子に門人某甲（又作傀儡子）などいふ名號をおしうるも
ありしど。其ハ未生の人にて。一時の戯きのみ。実に其人有にあらず
然を文政文化の年ごろ（コロ）に生れたる壮傻（ワカウド）等が。吾弟子になりまく
ほりして。由縁に縋き。紹介の人を求めて。漸次（シダイ）に請来ぬる者ハ
九名有しかど。吾一人も是を許さず（中略）其が中に入門を辞退の
後ちのうも及ばず。いかで戯作に琴字を許しぬ人といふ。琴字
をもて名號に做を者ハ吾のみならず昔も今も儒者に琴所
琴臺などあり。そハ名位（カク）の隔意なかるべしといふ皆饒（イツワリムタリ）びて。或ハ
琴雅。又琴梧或ハ琴川。又琴魚など書る者五六名ありしかども。
それも一両稔の程にして。風く胡蝶のごとくなりにたり今思へば。

三十余年の昔なれバ。此人何時生れ死せしや。いかにも知らず。是等の
中に。櫟亭琴魚ハ関しけらず。是も吾知音の友。伊勢人藤宿(ヂウ)
の事まで。窓螢余譚。青砥石文などいふ物の外の作者なりしが。
惜むべし。四十余歳にて。身故(ミマカリ)き。○下略

○東岡舎羅文ハ馬琴子が兄なり 性俳諧の発句を嗜み吟ずる所
多し 諱興旨 称嘉右衛門といふ 寛政十戊午年 八月十二日没す
于時行年四十 深光寺に葬る法号 深誉勇遠羅文といふ 墳墓の
表石は病中の吟を馬琴子が書るを彫なれども 歳月を
経ぬれバ石面滅て 読得安からぬぞ うらみ滴しつ

○八犬伝 終りに全局を結び訖しとき「いつまで」と八見る人ありて八重まけれ
うるやと同にはかるるす 書 なかりける也をなかれつえぞ

なりし書 巻川に独あらる世八 箕持の杉の古葉も云の花をも
子等にをしへて つまるぞうらさ

○文政八乙酉年 九月二日 初て翁と知己となりぬ 其後文政十一
子年 八月廿六日 再び出会なりしが 其時翁が初て著述せる也
たる冊子を所持の翁ありて云 寛政二戌年 深川にて何やらん開
帳のありける時 京の壬生狂言来り大に行れければ 其年なりひ
記して 遺果(ツカヒハタシテ)両二歳狂言といへる二冊物を 是豊国の画にて芝の
甘泉堂が梓に其年発板し それよりうち続き新作せり 是
まで自作の冊子一つもあらざれば所蔵せしが 飯田町に在りしころ
一年の夏二階の物干にて 虫干の折 冊子を風に吹とられ
たるを久しく吟やりなん 文化三丙寅年 出板せる武者修行木斎伝

一部をいづこへか失ひつさらる其後ハ骨董舗上なんとかく
その物あらバ買とらん事を思へど近曽ハ歩行自在を得ざれバ
杖をも庭の外に出ず逍懐初ハそのみちと得るまじけるに
予曽て在中勤のいとま有る日ハ市中を緩細せり故になし
彼本屋偕の骨董舗上に是を貧ぶ償とりて進せんとおもへ
つ常にその事を心に忘れしにおよそ十三とせを隔て然
せし時より五年目にして天保三壬辰年　月　日ハ忘れたれど
量らず　彼双紙の手に入りしぞ目を疑ぶ閲覧せり　翁の
許を詣く懐にせし本屋偕へと与へられぞ翁悦びみずから
納せし意を遂たりず　この偶物ハ何とましてそなし　ある心の
切なるより今しあん手に入りし物なれバ長く秘蔵し侍る是まで

拙作の蔵書闕ざる事をほこりとて　作者意に叶ひつましぬ
○翁が齢をし天保六乙未年六十九歳なれバいぬる明和四丁亥年
の生まれ　六四歳のとき拙作の二部雅言の草稿成りて　此分多
の時新板となりしるものあり
○一日翁とむかしの双紙の物語におよべると絶てかりて曰黄表紙の
初まりしものハ恋川春町が文武二道万石通また其後三和が天下一面
鏡梅鉢なり此頃より双紙の改むつかしくなりしと又洒落
本と称る物まてハ京伝が通言総籬之裏なりと語られてり
予もこれ此草紙とおもへとへりしか当時の禁忌の事なれバ
しるしおかず　古翁の物語もつきて思ひ出せる事あり　文寿堂
丸屋文右衛門いまだ書肆なりしころこの北家の書画帖に詰ていふむかし

京伝が作の天下一面鏡梅鉢（作ハ三和なれども京伝と定るハ売出さんがためなり）大に行はれて
板元ハ耕書堂蔦重なりしが其の頃ハいまだ新吉原揚屋町に
住居して これ草紙の売れたる事夥しく 同座仲間ハ明ても
更なり 諸方小売店の者までも 吉わくと買とらんとて日毎に
門前に市をなし 草紙の製本なるをまたず 摺本のまゝを
車に積て帰りしを 道（ミチ）にてそのまゝ 買とらんと争ふものも
ある程にて 右の摺本へ表紙綴糸を添へてつかハすと 懇望の
ものハ悦びてこそ返り先にて仕立売物にせしとなり 稀なるに
悦ぶべき事なるによりて 終に絶板を命せられしと語りぬ
○翁が著述の読本をしめりしハつゞく 里見八犬伝なり 其八犬伝
と朝夷巡島記とを評判して 犬夷評判記と名付け 黒表紙を
かけて榜本三巻となし 自身が役者評判記に擬へて 文政元寅年
六月刊行しつ 批評ハ三枝園主人 答述ハ馬琴 考訂ハ櫟亭
琴魚なり 雅俗と東都との書賈連名にて発売しぬ かまへハ
世人の評にもいづれなる翁が名誉といふべし 文政十二己丑年卯月
さる日の七日 渓斎英泉子が家に請来て 物語のついでにいはく
在下いぬる日曲亭翁が許にいたりしと紀翁の申さるゝハ 昨日
何人ぞや有名なる家製の奇應丸一包買ふものあり一封を遣し
是を先生の御方に届けてたまはれといひ捨て帰りけり 其一封を
披見らるゝに この書ハ出板せし近世説美少年録巻の三緑異亭
の條におよび 五の巻二職の殺の趣向をいたく譏りて 後に傾城
水滸伝をソシリたるとなん その一封の書にも 渓斎生にまかせけり

ゑありといふ文字より前に深川に住居せる書肆何かしといふ
もの一封を投じたり披き見しハ古のごとく水滸伝の著述を所望し
きるに綴（ツヾリ）雑して唐山の事を日本のやうに写しける書
あまた蒙汗薬の事を書いれしハいかにぞや日本にハ云ところの
薬ありとかよし翁これを答ていはくしびれ薬ハ原来水滸
伝の作者がこしらへたるにて宋の代にもあらずその地にもなんや吾邦に
おいてをや然るを不穿鑿にて人をそしるハ笑ふに絶
たりと翁のいはれしとて渓斎のかたりき

重田一九小字幾五郎幼名七郎駿府町奉行組同心重田鞭助長男安永四年乙未ヲ以テ駿府ニ
生ル幼ニシテ文才アリ俳諧歌ヲ善クス寛政元年己酉五月廿一日父鞭助ニ代リ駿府町同心タリ然ルニ
放縦不羈胥吏ノ職ヲ奉スルヲ肯セス同七年乙卯六月家弟義十郎ニ家ヲ譲リ江戸
ニ出ツ時ニ年二十一〇天保二年辛卯年八月七日江戸ニ病没ス法名心月智光居士 享年五十七
右一九氏裔孫静岡県士族重田栄滋氏報知ニ依ル
按スルニ一九膝栗毛初篇偶成リテ剞劂ニ分シタルハ享和二年則チ春秋二十八歳致仕後八年
目ニシテ東海道筋京大阪ニ至ル迄正篇稿ヲ脱シタルハ文化五年則三十四歳ノ時ニシテ七年
ヲ経テ正篇ノ稿ヲ全成セシモノナリ〇膝栗毛発端一巻ハ文化六巳年稿ヲ脱ストイフ其中載スル
所ノ狂詠ハ全ク一九の[illegible]あり故ニそれて叙述を除[illegible]ものありの家ハ一九駿府ニ在ル時ニ
口吟スル所ノモノナリトイヘリ
一九家にある事ハ家人さへしらず机辺凡百の物にまで[illegible]下し居る事なかりしにこそ
稿と余照書とを[illegible]
机辺に狼籍たり膝栗毛を著述中ある年の夏[illegible]
奔放[illegible]遊[illegible]を生し[illegible]
家は[illegible]枕衾を[illegible]机辺一切の物[illegible]
つくへくもあらすなりて[illegible]家人もまた滑稽なりと云ふへし

十返舎一九肖像

十返舎一九

重田氏名貞一通称与七といふ駿河の産にして居を橋町又深川佐賀町に占め竟に通油町 書肆仙鶴堂の裏に移住せり

○墨川亭曰一九幼き時市九と呼ぶ故に市を一に作り雅名とせ弱冠の頃東都に出或侯（一説小田切土佐守にておはせし時その頃にて侍僕なりしといふ）に仕へそのち大坂へ登り彼地に住て志野流の香道に称誉あり十返舎の号ハ黄熟香の十返をとりて称ぶといへり寛政のころや並木千柳若竹笛躬と偶に木下蔭の浄瑠璃曲を編述しけるよし浪花にありて自ら香道に拘ふ事を棄て寛政六寅年遊び東都に来り始て稗史あまたを著述して耕書堂の梓に上せて流布せり 天保二辛卯年病て没す浅草古冨店（トデタナ）

大朝云 木下蔭狭間合戦作者連名ニ 若竹笛躬 近松余七 並木千柳 此余七とあるが一九なるよし 活東子云爾

なしびに市譜自筆の撰(ウツシ)なんど書集て二巻となし人に見す
べき為もなく秘蔵しが何ゝ日吾師墨亭月麿に寄に見るべしと
先醒翁て田足市大人のうへにして八能こそ書集られ揺
もる事多かれも大きに兵名なりとて急近く任ける長亭
五葉をも採きて拙著をあてさしおきるに長亭感ずるを
著しく一覧の上まだ身の小傳ある市譜の一冊へ所蔵の原を取る
押あとせりそれより彼方こなたと人手に傳へて式亭を
もじめ或ハ筆耕書家なども一覧あるに到りて終に十返舎も
この拙著を披閲せりとぞ終わるに其中なる六人が小傳に或人の
回一九子漂泊のうち寺の門番をなしけるを何りと書しを実子
終にとかく世に知しめたるを恐めるきまる実る事

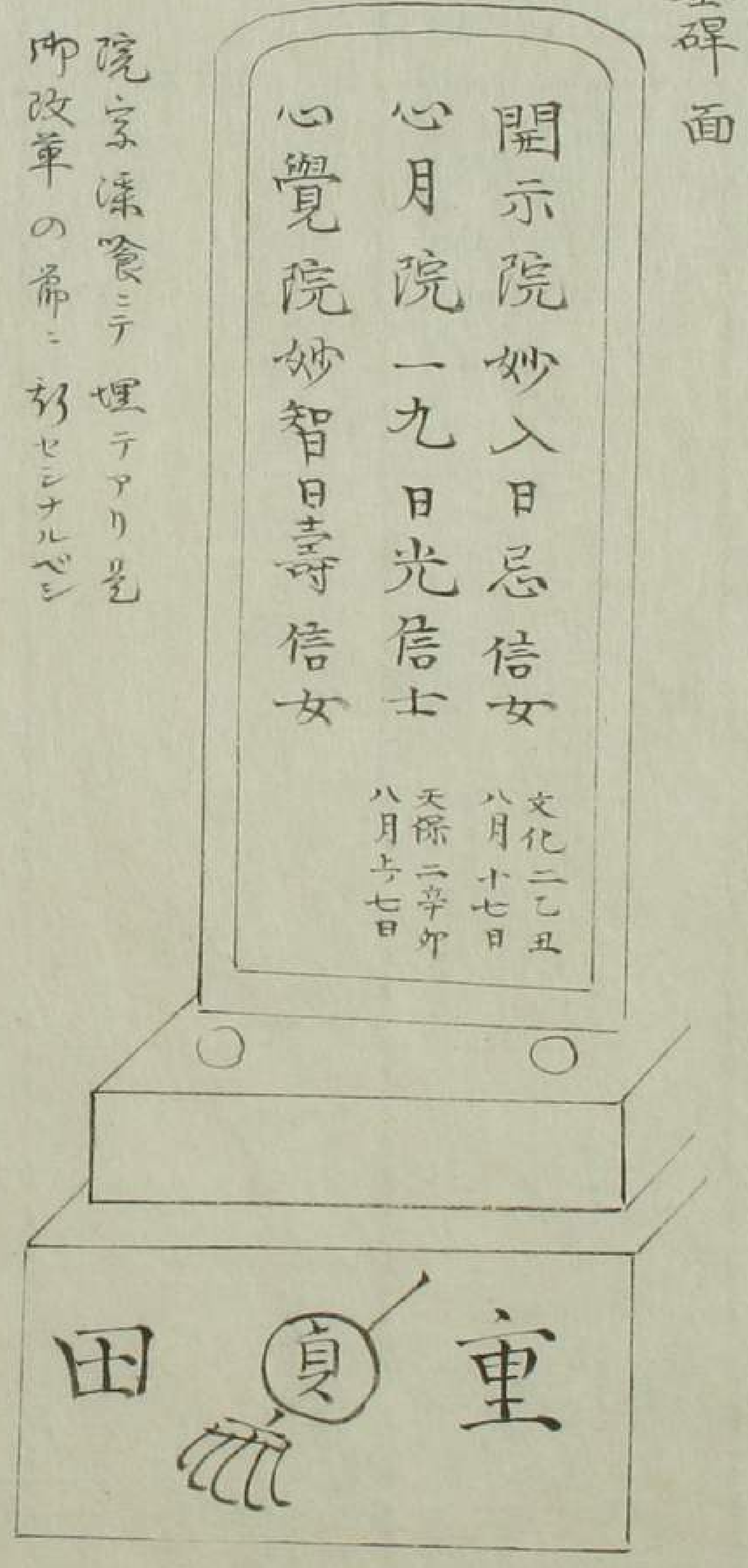
活東子云パイとハピの假字たがへりされどそのまゝを記す

善龍寺 俗にぬけ寺ト云 地中の東陽院に葬る 墓石ハ惣札場裏ノ方ゟ二側目ゟ東三列目

辞世 此世をばどりやおいとまにせん香と ともにつひには灰左様なら

十返舎一九

墓碑面



院ノ字漆喰ニテ埋テアリ是御改革の節ニ彫セシナルベシ

文化十癸酉年 市稗史通と標題して 戯作者浮世画師の小傳

あらざるべしと書斎にて露(アラハ)にまさるに似たると思ひし心中に此
事を思ひ居たりしと折から去る甲戌の春師黒亭が
書画會筵を油町北新道若菜屋の楼上に開かれし節
十返舎ハ紺屋町なる一九と兼て親しかりしが一九が亡妻の一周
忌の仏事に招き酩酊の内略師が余席へ来りしが縁て
予とハ師が許にて出會し去年酉の春ハ知己なりけるぞ
予を傍にまねきて曰章尓なんどさまざまの出板せし君が書の中に
こなたと見ゆるに僕の少傳に寺の門番をなさしめてありとかや
たるがこの事ハいかなる人より傳へ聞き書れしにやと問ふ予云
さるところより聞きてこの人の名ハ聡(タミ)に知居られど訪問けら
まそハ浚いかる事をいひ出されしも知らざればただ世の浮説也

定かならぬ事なりと答ふる時十返舎ことさらしく氣色を
変じて云やう世の浮説を挙て世に弘むるハ迷惑なり僕ハ
戯作をもて業とすれども弘められてハ生業の妨となり
ぬまことで貴君が上にも悪しき事を書れして俸禄をも擲つべき
程の事を書んと思へり その心を得たる人といふ予答て云いや
さる不理ないかなれども拙著ハ己まで一個にて楽を秘箇にのみ蔵て
人にハ見せんとの業にも非ず文操に上にも世に公(オホヤケ)にするにもあらぬ
随筆の書のみなり 原(モト)より家にて秘する随筆なれば高貴縉紳
家の忌諱の事をも書留おくハ尋常の事なればとて何
憚る事なく書とめしなり たとひ家の師にも見せざるより
漏るべき事も出づべしなれバ自今懐に他人にハ見せまじ

篁も宿しかへりしと読つれども一九ハ酔を常たるゆゑにて
こゝ其子以前の條てふく操回しく云ひ罵まで侍の人々も
氣の毒げに集ひ合急痛かつかひぬまで打さやぎて子も桐阜ハ
略所のかへ他何時までも果しなくれぞ後日の論に及ぶに如じと
思へバ當日の會主なる師に此よしを繊細に告しのバ先おのこ
まのせて備ハゆるべしといふによりて子ハ帰りぬ其後師月麿
十返舎に對ひて兼て信友なりにさる道理をことふとなくバ平
生の上にかゝんと吾會席にかて出て云ひ罵りハなどなかりけず
吾子も述懐を合よしの旨をつたへたりなんやなど彼是ていふを
日来むつましき朋友の人々もとふかくとなくなくて其日の事ハ
納りしとぞさるに十返舎と子とのなかそのまゝにならしおれ

ぢかく辛亥五月を稀て子が同門武麿が書画の會ありけれバ
此日たがひに出席して和睦をもとこそよからめと武麿らが
ものいひまて自ら子が方へ訪来ていある日の事ハ十返舎も
まつたく酔中のことなれハ聊も覚し居る事も候はバ心に
さへられ候へ異日左下が催しの日に和睦して交りを結び師を
もじめとして餘の朋友もとのく其ことの旨願ふくと云ふ
いひなぐさむるなぞ子も素より事を好むにあらねバとかくも
よきに計ひ給へと答へく其後武麿が會席に出て別席に
おいて十返舎を初として其餘出会ける人々その席
会て和睦の盃をめぐらして終に波風ハ納りぬ彼ノ稗史通
二巻ハ墨亭の撰けるを師より奥の八戸屋の改題畔李君

奉まつり こゝに記し 右のごとき 障れる 事のあらんをおもひてこそ
○文化十一甲戌年 発市せる 十返舎が 著しゝる膝栗毛発端と
よぶ一冊を 鶴森堂永寿堂 文金堂らが 梓行せるところ
右の巻中 口絵ます下にかくあり
近頃 京摩あまりの 稗史通と 題して 新古稗史の 作名
画工の 出所来歴を 記しゝるを 閲しゝるに 悉く 粗略して
実に 労して功なき 稗史(不通)の書といふべし 予が膝栗毛は
八編まして 終るとみる 京摩ら書ゝらハ 続編の出づる事を
云ゝさるなるべし 既に 当年 続五編にいたれども それをしりて
志るし 早ぬ
まゝ同年同じ人の 撰しゝる 続膝栗毛五編 冊二 下の巻 巻末に

書売が 業のかたはらなして 十返舎が 小伝を作りしる 文化
庵に
上小伝略
戯人稗史通と 表題して 新古稗史の 作名画工の 出所来事
遺れるを 模写せしを 見しゝるに 一九生の事 にいたりて 甚だ
謬誤ゆり 依て 是を 記す 畢　　西村永寿堂識すとなり
おのれつらつら 按ずるに 続膝栗毛五編 なるび同発端とともに
発行の 前年 癸酉年 草稿成して 遍く独著の 稗史通を
十返舎の 披見せる 頃なりて 墳急寛あるならむ なれバ 訪のとき
それ りきたるならんされど 翌年 前條のごとき 駁論おこりしく
とかく 前ての 流れいと 唾しく 成りたるそのしく 求るなかりしか
是ありて 粗人に 名を 知られ もの右両編に記しれる事 と

胡吉ぐさ　名もなく　やま川

○例の書画帖に大人の染筆を乞しけるに

隠陽のみぎりといへども陽には極なし

川柳点の柳ぐるに神子をこふるなく宮ぞしらと

いへるは是陽のもじらなりされどうらまち

みやし線の大恩ぞしらなりけし　大あれむちの神子の尊敬

常に口ずさむ和のきよ歌のつは叢苗のひとつふたつそのす

（意）ちぐりや君にふるき福杖のうちよりして生まれてける身は

（近意）枝嫁のららゑるぞかり　近くれど針のそれある絲もやぐとも

（古例春興）賣りのにつぎまる　花の枝ぶりもつくり不自なる桜の毒やる

（柳の画に）乾薊の玉柳とて　地にとゞく　枝ハ柳をもちらしひける　まれ

（蕪菁の画に）唐にて八人参といふもとあり　是大根のくきりなり

天の原ふりさけ見れハ円のうづにつるまゐや　遠山の宿

とのひとく痛ぶそしきけハ十七の鬼のひくとふるえぬ琴の音

わとぞずに酒ハうまひの姿つらぬきくまゐるのむ論外上戸

（弥うきの賛）是乞身をたつるあとをすきぶひに薬せんとうりて宮也寺の僧

（大原女の賛）烏羽玉の髪の黒木に　大原女のさしける　梅の花のかんざし

（桂女の賛）どなたくにもりしの　たちまちて

（梶峯の画の賛）生酔が三人よまいぞささぞしく　かつりかまり姫てつかぶりのふん

柳亭種彦肖像

柳亭種彦

姓源名知久愛雀軒と号し 足薪翁と号す 又偐紫楼の
号ある八田舎源氏大に行はるゝによりて之通称高屋彦四郎と
いふ麹町まて食禄二百俵賜はる臣横氏にして甲州の士也
浅草堀田原に第宅あり 初め　　が門に入りて漢画を学び
後俳諧の古調を好みて 又川柳が俳風を嗜みて秀吟多し
天保十三壬寅年 七月十八日卒す 行年六十 赤坂一ツ木平河山
浄土寺に葬る
法号 芳寛院殿勇誉心禅居士
辞世 ちるものにさだまる秋の柳かな
源氏の人々のうせぬひしも大くく彩ありとありて

我も秋六十帖をおくりこの状

○柳亭種彦と戯名せしハ幼きころ癇気強く兎角ニ腹たち怒りしぶる父の教訓して一句をつくらる「風ニ天窓まかせて眠る柳かな」ト是より身を慎ミしとぞ　又天明風の狂歌を嗜ミて狂名を柳風成とし後改め心ノ種・種俊とも是大和歌ハ人の心を種としてといへるをとりて称せしよし　其頃小谷邊ニ三彦と唱へられて（他ニ家あり）種彦先生其一人ニて初め柳風成といへるによりて柳亭と号す　俗名を彦四郎といへるをもて種よしの彦〳〵とよびたりしゆゑ後の字をとりて種彦と戯名をつけられしといふ　又三ツ蔵の本ハ先生壮年の頃ハ戯場を好て詠ミ故人坂東秀佳（二代目三津五郎　今ノ三津五郎父なり）の藝をよく写され素人狂言又茶番狂言なと作られ　折ふし三津五郎も傍に居たるがぞくなられ茶番連中まて三ツ彦〳〵といひならはせて　め(?)ぐ(?)戯名を用ひなしなり　一時先生の如に戯作者も俳優者(ヤクシヤ)や傾城ニ扮し狂言ばけいせなハ顔のこしらへとて張も意気地もなくまる髷の鬘ニ衣裳の綺羅なれバ客つかず　又戯子も罵つきよく藝も未熟なりすとても是も衣裳の綺羅と法人も敬をならしとせざれハ是ほどにこそすゝむ人ニなくて見物の客なし　此理ニ似く戯作者も全体が上手にてよく綴るといへども　独き画工にあらざれば悪き彫工の手にかゝり　外題ともに悪しくなれハ賞(ハエ)なくして売れず　当りをとる事なかるべし　されど後ニ上手と人ニいはるゝものハ未熟なる時より苦労ありて人ニ家ニ一ツの噺

談洲樓焉馬肖像

ありむかし名人と呼れし俳優人元祖中村仲蔵（秀鶴後中山小十郎）初ハ藝にも
みえゆくまで俗ニ云いくらにて顔を赤く隈とり蔵衣裳の素袍にて
結び大名ニ出しが粗縞き麻素袍なれど二百文にも足らぬのりけ
おちて皺多く又若しきを楽屋ニ入て殊外の同位の役者ハ今日までの
うけて見るもやらず其後ハ衣裳揃へあけまて文明る日出場来られバ
第の素袍を着て出るゆゑにいとゞ苦しかりしに秀鶴一人りハ衣裳を
人まかせず自ら其素袍を水のしをよくして其日舞ニつくれ
ぶく下拿ニあし来しかバ翌日着て舞臺へ出て列坐の戯子と
立ならびし時と一際勝れて立派ニいかにも上手らしく見え看客の
目もたちなまこそ戯場中の役人も目をつけて彼ハ下慮量なる
者之後の狂言よりまでの役者為なくんと其役をさせて試んと衆の

活東子云前子と思へ
ども其ハ足世ず
されどころろのハ形
り直をべきにあらざれバ
そのまゝにかしわく

中々抽く役割を謂ふるに業ニ遠からず 其役々も相應ニ勤めて
見れバ次第しるよき役を勤め位も昇り終ニ名人とあり今ニその
誉れを殘せり 天下ニ名を更らさ者ハ初より其器量氣ニこえたり
戯作之式秀鶴が心をもて書ニ心を用ひ一句一章たりともおろそかに
書ましきものく丁寧反覆して つまるに筋の通る也しに
書られ画ろうにも工風をこらしまへきうと 常ニ物語りのことさらなるハ
墨川亭ニも嘆きし とぞ 又常に用ゐる所の硯ハ前子の形し
たるあり 其蓋ニ自詠の狂歌を彫らせたり 其歌
名人にあれかし前子とおもへども上にうくくへくハまだぞろぞろ

烏亭焉馬

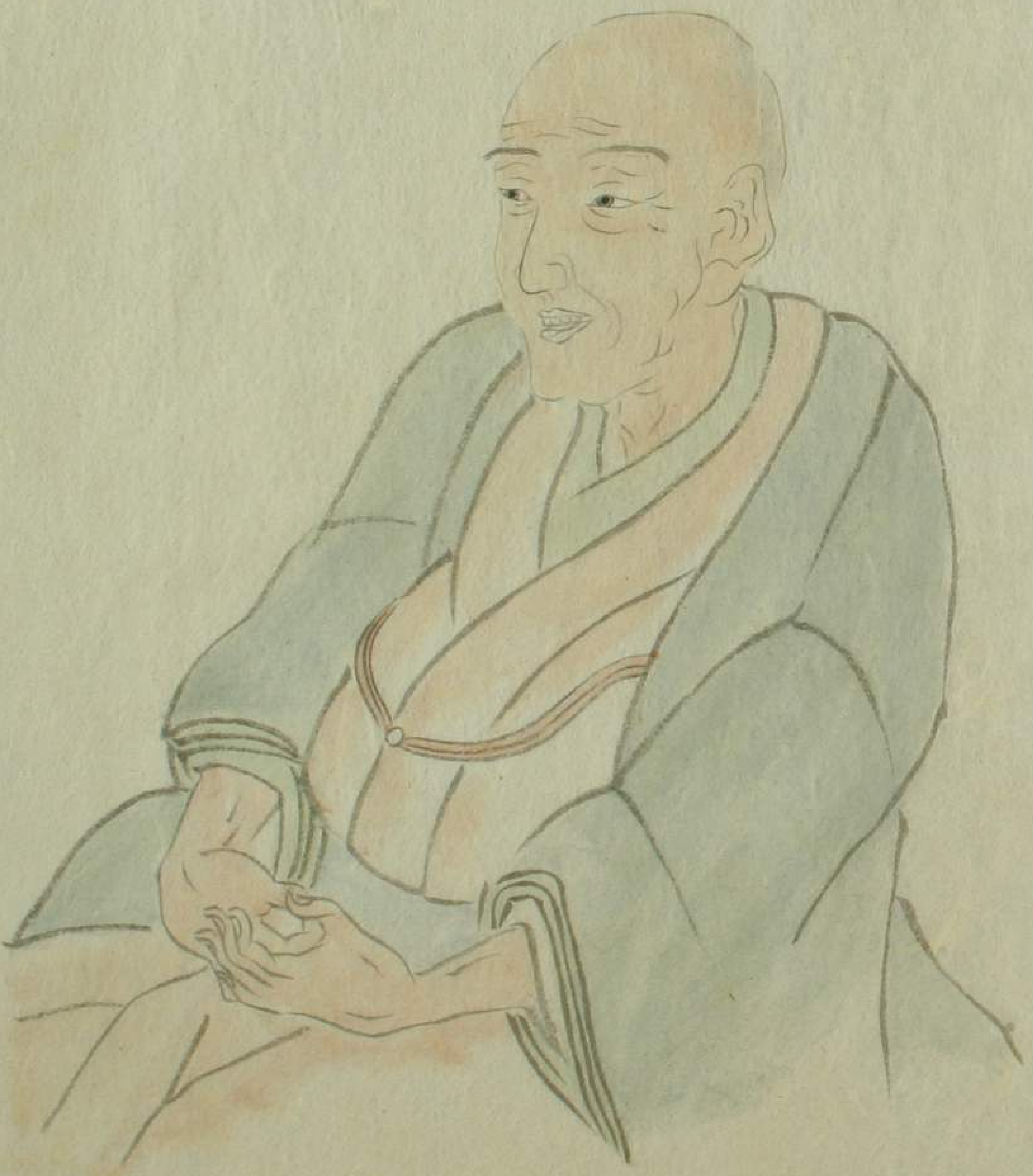
中村氏名英祝号を談洲楼といひ別号を桃栗山人柿発斎といふ狂歌は野見てうふじんすまうねの名なり 和泉屋和助と称して本所相生町に居住す 家大工の棟梁之戯作の古老して安永天明寛政年るまで一枚摺物或ハ洒落本又ハ浄るりの作等己久しく廃れたる落し咄を再興し 又戯場に推びて狂言の作を補助せり 草ぞうしを著作せしハ寛政五年を初也とぞ 文政五壬午年六月二日没す 年八十 北本所表町 牛寶山最勝寺 天台宗に葬る

法号　三楽院壽徳焉馬

辞世　おもひきや うききの花を今ぞしる □風□記 歌舞の道

著述　歌舞伎年代記 十冊外 又編近世冊

北齋肖像



北斎号を錦袋舎といふ初め春朗といひて勝川春章の門人也
俗称鉄五郎後年破門せられしより勝川を改め叢春朗といふ
其後俵屋宗理が跡を續て二代目宗理となる後故ありて名を
家元へ帰し北斎辰政（寛政十年頃）と改む其名を門人に譲りて雷信と
改め再門人に与へし載斗と改め其名も門人にゆづりて為一と
いふ也本所の産にして住居数多かはれり御用鏡師中島伊勢が
男也仮名を時太郎可侯といふ又是和斎といひ魚佛ともいふ
嘉永二己酉年四月十八日没す年九十浅草六軒寺町誓教寺に
葬る法号　南照院奇誉北齋信士
辞世　人魂でゆくきさんじや夏の原

豊國号を一陽斎といふ 歌川豊春か門人也芝神明前三島町
の産にして人形師の男也俗称倉橋熊吉といふ後に芳町に住し
後堀江町に居す又槙町油店と称す 歌舞伎役者の似顔絵の
名人なり又読本草ざうし 合巻の類枚挙にいとまあらず
文政八酉年正月七日没す 年五十七三田聖坂功運寺に葬る
法号 得妙院實彩麗毫信士
辞世 焼筆のまゝをおろその影法師

豊國肖像

國貞肖像

國貞号を五渡亭といひ後香蝶楼と号す俗称角田庄之助
本所五ツ目の産也後亀戸に住す豊國の門人にして師名を
續く今二代目豊國と改む役者似顔絵の名人にして出藍の
誉れあり 天保巳年 嵩谷の画高嵩凌が門に入りて英一珪
とも号す現存也

御急ぎ給ふまゝの世草稿のまゝ人に寫さしめ不遂
一校候ていと〵觀語遺漏なほ多かるべし なやまり
有之候て速子 可然御修正可被下候

東紫様

活東子

明治四年七月 はなはだ中根香亭氏より借り
三十年を経田子に写さしめ画を秋香に係り
しつし加へるもの也
同しきとしの八月十日

獺祭魚齋書牋

中邨秋香 画
若し此人なれは
山梨玄度、稲川居士様
其の人なり